



AIT を巣立つ若者たち

河 野 泰 之*

この1年間は8人の修士課程の学生達と過ごしてきた、と言っても過言ではない。私がアジア工科大学院（AIT）での任期を終えると同時に、彼らもAITを巣立っていく。

パキスタン人のM君はパキスタン農科大学を卒業してすぐAITに入学した。多くの学生が数年間の実務経験を積んでから入学する中で珍しいケースである。入学当初の見学旅行でピッサヌロークの灌漑局のゲストハウスに宿泊した。翌朝寝ぼけ顔で現れたM君は、「洗面所は汚いし、水も濁っている」と、まるでこんな所は人間の泊まる場所ではないとでもいいたげだった。この2年間で少しはたくましくなった。修論発表間近になってからも私の無理な注文に最も忠実に従っていたのは彼である。卒業したらラホールに帰ってとりあえず職を捜し、それから機会があれば博士課程へ進学したいという。今は定年退官しているパキスタン農科大学元畜産学部長のお父さんのこねでも、何か職が見つければよいのだが。

ネパールからきたSさんは、ネパール唯一の農科大学の講師を辞めてAITへ入学した。2歳になる娘さんを両親に預けての単身赴任である。調査のため一時帰国したときも、子供は両親に預けたままで、彼女自身は、やはり同じ大学で講師を務めている夫君を連れて現場に住み込んでいた。私が彼女の調査地を訪れたときは、行きと帰りに1泊ずつ、カトマンドゥにある彼女の両親宅に泊めていただいた。お父さんは元ネパール政府の高官で、つくば博のネパール団長として日本に滞在したこともあるという。カトマンドゥの街中の、外見はみすぼらしいが、中にはいるとお母さんの胎内を思わせる暖かく心地よい居間で、ウイスキーをちびりちびりと飲みながら論じた貧困と悲惨の違い、公的な機関がすべ

きことは何か、という議論は忘れられない。彼女は卒業後は、今度は夫君が分子生物学を勉強するために奨学金を得てベルギーへ留学するので、それについて行くそうだ。子供は当然両親が面倒を見ることになるだろう。

バングラデシュからきたR君は厳格なイスラム教徒である。学生20人ほどとマイクロバスに乗ってチャオプラヤデルタの土地利用と灌漑施設を見に出かけた日、夕方になってバスを止めてお祈りしたのは彼だけだった。きわめて家族思いでもある。4カ月に一度の学期休みには必ず自費でバングラデシュに残してきた奥さんと娘さんに会いに帰っていた。このような性格が災いしてかどうかはしらないが、成績はクラスでべべだった。退学ぎりぎりまで成績が下がったため、彼を呼んで事情を聞いたことがある。彼によると「1時間半とか2時間の試験時間は短すぎる。自分はじっくりと考えるタイプである」とのこと、おもわず納得してしまった。彼は、卒業後はバングラデシュに戻り、ダッカの街中にあるジュート研究所に復職するつもりである。

同じくバングラデシュからきたA君はもう少し悪知恵がまわる。選択する授業を、担当教官の採点が甘いかどうかで選んでいたのは彼である。おかげで最初は中の下ぐらいの成績だったのが、最後には中の上まで上昇した。最終学期には奥さんと3歳の娘さんをAITに呼んで、快適に暮らしている。卒業後は農業研究所に戻って働こうか、バンコクで何か職を捜そうか、彼は迷っている。彼の奥さんに「奥さんはバングラデシュに戻る方がよいでしょう?」と聞いたところ、彼女もバンコクの方がよいという。高給が魅力のようだ。

タイ人のE君はカセサート大学を卒業後、コンサルティング会社で働いていたが、大学教官になるために会社を辞めてAITに入学してきた。現在のタイではきわめて奇人である。給料が4分の1ほどになってしまう。ただすでに話はついていたら

* Yasuyuki Kono, The Center for South-east Asian Studies, Kyoto University

く、卒業を待たずにカセサート大学の教官になり、私は指導教官として「E 君の AIT での講義や研究活動は、貴学での任務を妨げるものではない」というカセサート大学の学部長あての証明書を書かされる羽目になってしまった。青田買いどころか、青田就職である。彼は今度は博士号を取得するために奨学金を得てフランスへ留学しそうである。フランスがベトナムやカンボジアへの今後の農業分野での協力をにらんで、カセサート大学との大規模な共同プロジェクトを始めたからである。

同じくタイ人の K さんは、タイのある大学の土壌学科を首席で卒業し、すぐ AIT に入学した。入学当初は英語で悩んだようだが、徐々に克服し成績も回復した。週末にはバンコク郊外の新興住宅地に一人で住むお母さんをアッシー君の送迎で訪ねていた。修論の調査地であるスパンブリへ行くときもしばしばアッシー君は同行していたようである。卒業までまだ半年近くある頃、タイのあるコンサルタント会社が彼女にコンタクトしてきて、就職先も早々に決まった。そして修士論文が完成するやいなや、彼女は働きだした。会社もかなりの技術者不足のようである。おそらく彼女の初任給は 20 人近くいる同級生の中で最高だろう。どうも彼女の姿は、切実に何かをしたいという願望のない日本の一般の大学院生像と重なって見える。さしてきばらず、さして成績もよくない彼女が、最高給取りになってしまうところが、他の国々から来ている多くの学生が直面している現実である。

ベトナムからきた V 君は私とほとんど年齢が変わらない。かつては村の漢方医をしていた家の長男としてハノイで生まれ、ハノイの大学を卒業し、水資源研究所に勤務するエリートである。ハノイの街

をバイクの後ろに乗せてもらって走っていると、彼が卒業した学校を始め、いたる所に彼の馴染みの場所がある。朝飯は必ずハノイで一番旨いベトナムソバ屋に連れていってくれる。彼の知識はハノイだけではない。紅河デルタの小さな街に行っても、その街で一番美味しい飯屋を知っているし、農作業にも詳しい。そして何よりベトナムにいたときの V 君はカッコいい。烏打帽をかぶった紳士である。AIT にいるときとは大違いである。V 君は今、バンコクで職を捜そうか、ハノイに戻ろうか、悩んでいる。

中国河南省水利庁、黄河のほとりからきた D 君は、AIT のスポーツ委員を務める。夕方になると毎日、バトミントンを楽しんでいる。明朗快活、成績も優秀な学生である。二人で鄭州から広州へ飛行機で到着し、ホテルへ向かうタクシーを降りるとき、運転手は即座にメーターをゼロに戻した。メーターを見ていなかった D 君は、運転手の請求するまま、正規の運賃の 3 倍ほどを払っていた。都会ずれしていないところが彼の魅力でもある。彼はバンコクで就職先を見つけたようである。台湾系や香港系の企業が進出しているおかげか、バンコクでは中国語と英語の両方を話せる技術者に対する需要が大きい。D 君は将来はオーストラリアへの移住を考えているようである。そのために鄭州の図書館に勤務していた奥さんと娘さんを早々に AIT に呼び、英語を練習させているようだ。

彼らの卒業後の人生設計は、それぞれの年齢、個性、能力、家族の事情などによって様々である。国レベルの政策も鋭敏に反映されている。タイ政府は近年、中国やベトナム人技術者に対しては、タイの会社で働くことを比較的簡単に許可するが、インド、バングラデシュ、ネパールなどに対してはヴィザの発給を厳しく制限しだしたようである。とはいえ、個々の人生が AIT という場で 2 年間交錯することにより、国や民族という既成の枠組みの超越にささやかながら貢献しているのではないだろうか。

(京都大学東南アジア研究センター助手)



自宅にて学生たちと